

興亞青年勤勞報國際雜記

山 崎 一 尊

一、内原訓練所にて

(一)

洗面用具を手につつまゝ、あまりの氣持よさについてふらふらと裏の方へ歩を運んだ。霧が晴れかけて、横手の松林の中の日輪舎がだんくはつきり見えだした。朝のすがすがしい空氣に、朝霧がほのかなオキシジェンの味をつけてくれる。新鮮な冷い朝の空氣特有のあの氣持のよさを私はオキシジェンの味だと思つてゐる。夜の間に冷え切つた澄んだ空氣に、サアーツと流れる朝霧の小さい粒が爽やかな氣體を混せてゆく。晝の訓練や暑氣が激しい丈に朝の心持よさが身に泌みる。しつこりと濕つた松の木によりかゝつて私は肺が破れさうになる程この空氣を吸つた。

松林の切れた所から遙か山の麓まで續いてゐる青田の稻葉は、露が一面にこりついて白つぽくなり、霧はもう山の端まで引いたのに、まだ見渡す限りうつむいてひっそり眠つてゐる。人一人見えない。ふり向くと炊事舎の煙突から、さつきの霧の塊りの様な白煙がしきりに上つて、湯氣の立つバケツを持つた二、三人の義勇軍の少年達が、煙の這ひ出る入口から出たり入つたりしてゐた。だがまだ配給を受ける窓の方がひっそりしてゐる。食事迄に大分あるなと思つ

た。

雨の降つたあまの様に濕つた地上にねころんで、服の濡れるのもかまはず私は頬にあたるヒヤリとした草の露の感觸を楽しんだ。身體が骨の中までしーん冷えてきた。大地はこんなにつめたいものかと思つた。

(二)

その日は義勇軍特殊技能隊の少年達が出發する日だつた。朝食を終へるころを見送つた。十六、七歳から十二、三歳位にしか見えない少年たちが、日滿兩國旗を先頭に、身體よりも大ききうなりユックを背負つて整列した。幾度も戰友を送つて聞きなれた型通りの送辭や訓辭も、今更肝に銘じて新しく感じた事であらう。直立不動で咳一つなく聽いてゐた。今まで自分を慈しみ育てゝくれたたつた一人の母を残して、或は父に兄に又妹に別れて、再び見ぬ生れ故郷、兄弟を残した懐しい村や町を、父母の住む祖國日本を遠く幾千里も離れて、友邦は言へ言葉の異ふ國へ入植する彼等の心情はどんなであらう。而も幼き少年達である。この健氣さはたゞく感激する外はない。此の少年達に征く日の心境を聞くに異口同音に、今一度父母と共に吾が家に一夜を明したいと言ふさうである。

式が一通り済むと、いよく所長への最後の敬禮——分列式があつ

た。義勇軍のラツバ鼓隊の勇壯と言はんよりはむしろ悲壯とも言ふべき行進曲につれて、口を一文字に嚙み締め、まっすぐ臺上の所長、彼等が日頃文字通り慈父に仰ぎ生命を捧げたこの加藤所長に最後の注目をしたまゝ、それ／＼立派に列をなして参列の私達の前を行進して行つた。そしてそのまゝ隊形を變へ、從隊となつてラツバ鼓隊を先頭にして眞直ぐ門に向ひ、廣い練兵場を横ぎり、はるか面會所衛兵所病舎の間に消えて行つた。だん／＼遠くなるラツバや小太鼓の音は、もう祖國をはなれる旅についた少年達の勇壯にして又實に悲壯なる足音である。小太鼓はこんな場合、不思議に効果的である。行進の起す風に二、三度土埃の中で舞ひ上つたまゝ、廣場の眞中にこり残された白い紙屑も、遠ざかつてゆくラツバや小太鼓の音に私は外人部隊と言ふ映畫のラストシーンをふと思ひ出した。去りゆくものゝ氣持に相違があるにせよ、残るものゝ氣持にそれと似通ふものがあつた。亂れたカードの役目を此の紙屑がしてゐた。だがフェエデがなし得たよりもつゞ／＼強い迫力をもつてこの場面は私の心に迫つてきた。

私はボーツミ霞んできた紙屑を、眼をパチ／＼させてはつきり見つめやうとしたがだめだつた。解散して涙が乾くまで紙屑も衛兵所も少年たちの通つて行つた足跡も、松林も、又臺上に立つたまゝいつまでもちつ／＼してゐた加藤所長の姿もほ／＼つみにちんで來て仕方がなかつた。

大陸の前衛士の戰士、全く彼等にこつてふさはしい名前である。この土の戰士たちがぎつかりと大地に根をおろした力強さこそ、やがて亞細亞を興す力となるであらう。

二、北滿昂々溪にて

小學校長の地方事情に關する講演が濟んで、私の隣にゐた生徒がペンをポケットにしまひ、今まで書きつけてゐたノートをバタリと閉じた。表面に墨で而もあまり上手でない字で「汗と學生」と題が大書してあつた。

「なある程」と思つて眞面目くさつたその生徒の顔を視つめてゐたら、なんだか急にをかしくなつてきて解散になるのを待ちかねて逃げ出してしまつた。

× × × × ×

或る生徒が内原での座談會の席上で我々が餘りに肉體的勞働に溺れて精神的な修養や勉強を怠つてゐることを詰つた事があつた。之は直ちに猛烈な反感を呼び起した。だがいよく現地に來て勞働に明け暮れる數週間を送つてみるにだんくその事が考へられ出し、やがて勞働ばかりして少しも頭腦を使はない我々のこの行事が何か大きな缺陷を有してゐる様な氣がした。

我々はたしかに肉體勞働に溺れてゐる。否、追はれてゐるに言つた方が適切である。我々の日課は起きて食つて働いて寝る、たゞそれだけだ。少しの暇はあつても眠つてゐるか、又目を醒ましてゐても寝ころんだまゝ雜談してゐるか、雜誌を見てゐるか、せいふく手紙を書いてゐるか位である。これでは所謂勉強をしない筈であり又出来る筈もない。

だが翻つて考へるに、果してこの勤勞の暇を見て自分の勉強をなすべきかと言ふことが思ひ浮んで來る。私は自分の癖から、これは一つ勤勞報國隊結成の趣旨を見るに限ると思つた。そして隊員手帳の中のその條項を探した。

「東亞新秩序ノ建設ハ青年ノ大陸認識ト其ノ實踐的奉公トニ俟ツコト大ナルモノアリ 仍テ本年夏期ニ於テ一般青年並ニ學生生徒ヲ大陸ニ派遣シ現地ニ於ケル國防建設文化工作並ニ内地ニ於ケル農業生産擴充計畫遂行上必要ナル飼料等ノ生産ヲ行ハシメ之等ノ集團的勤勞訓練ヲ通ジテ興亞ノ精神ヲ體得セシムルト共ニ直接生産並ニ建設等ノ事業ニ協力セシメンガ爲興亞勤勞報國隊ヲ組織スルモノトス」

これは文部省から交附された手帳である。ついでに滿洲國政府から下附された手牒の中にこれに相當する個條を探るに、

「現下ニ於ケル滿洲建設ノ重要性ニ鑑ミ日滿共同防衛ノ見地ニ基キ滿洲ニ於ケル食糧飼料ノ増産日本ニ對スル豊富且低廉ナル飼料ノ供給竝ニ國防建設ニ寄與スル爲銃後青年ヲ動員シ滿洲建設勤勞奉仕隊ヲ編成セシメ主トシテ國境地帶及其ノ背後地竝ニ開拓地等ニ於テ土木農耕其ノ他ノ建設事業ニ勤勞奉仕セシムルト共ニ併セテ日本農村問題特ニ飼料問題解決ノ一端ニ資ス。」

これら二つの趣意を見るに、この企劃が我々の考へてゐたより以上に實際的、經濟政策的なものである事に氣がついた。特に後者にその色彩の著しいのは、前者が組織本部たる文部省の趣意であり、後者は實踐本部たる滿洲國の趣意であるからであらう。兎に角私はこの趣旨を讀むこゝにより、自分の行ひつゝある仕事に對し、更に認識を新にした感があつた。

少し横に外れたけれども畢竟この事業の目的は、少くとも私には實踐による興亞精神の體得であると思はれた。要するに我々は、與へられた仕事を眞面目に力一杯やればよいのである。精一杯働いて充分又休息すればよいのである。此處に至つて私は再び此の作業に對する新な情熱が迸るのを身體中に感じた。そして勉強なぞと言ふ小さい事に捉はれず、元氣一杯仕事をしやうと思つた。

(二)

八月十六日。此の日に作業が完了した。思へば七月下旬以來毎日々々の七時間近い激しい筋肉勞働の成果だ。三週間の汗と脂の結晶だ。甕々ミ續く長壕に、幾本も出來上つた短壕の列に、又小山の如き土の臺に、我々はその瞬間涙を流

して萬歳を叫んだ。この眞新しい工事を自分のふり上げたスコップで作り上げたのだ。もく／＼もり上げられた固められた新しい土の色ミ、眞黒く陽に灼けた腕や背中や顔の色ミを見比べて、よくやつたなあミ我ながら思つた。

「作業は済んだ。サア歸還だ。」

その日作業場から歸るミ我々を襲つた第一の氣持はこれであつた。いよく／＼出發の日の二十一日迄我々は何か知らそわ／＼して少しも落ちつかなかつた。そして喜びに胸を膨らませながら、しきりに日本の土を戀しがつた。

出發の前日、私は前々からの約束通りN君及びS君と共に夕方三角點へ上つた。「世間」を忘れて浩然之氣を養ひに行かうミ言ふのである。三角點は我々の作業地點から更に一程離れたゆるやかな陸の波の頂點あたりに空を衝いて五十米近くの高さに丸太で櫓が組んである。底面が三十五米平方位ある四角堆形のもので頂上近くに四疊半位の板敷の所がある。三人でそこへ上つた。

太陽は晝間の強烈さをもうミこかへ藏つて地平線近くに火の塊の様に眞赫に輝いてゐた。遙か足下より見渡す限り地平線下迄つゞいてゐる青い陸の海が斜に赫い光を受けてたまらなく私たちの自然の美に對する身體中の感覺や感情を刺戟した。

このミきの壯快さ、愉快さを私は慙に言葉を以て限定したくはない。私たちはこの落日ミ夜のミばりに蔽はれんミしてゐる大地ミに我を忘れた。

「いゝなあー」しばらくして私たちは互に顔を見合はせて言つた。

それから私たちは持つてきたドロップスを頬張りながら幼稚園の子供の様に噪いだ。私たちは知つてゐるだけの歌を歌つた。足ぶみをし手を叩いた。その内に太陽はすっかり沈んでしまひ金色の餘光が、沒した太陽の遺徳を顯はす様に輝いた。そしてやがてそれも薄れていつて青黒くなつた空が夜の威壓を私たちの頭上に加へてきた。

私たちは追はれる様に、でも名残惜しくそこを降りた。途中しばらく見ない内になつかしいながらも何もなくよそくしく遠いものゝ様に感じられてきた作業地の土の色を愛で、私たちの掴つた壕の中を歩み、馬市で愛馬に別れる百姓の様に平手で土壁をたきながら再び見ないかも知れないこの地に別れを告げて暗くなつた道を宿舎へ急いだ。少しく世間を忘れ過ぎてゐた私達は私の時計の狂つてゐたのにも氣がつかず遂に夜の點呼に遅れかけてもう少くして日直將校から大目玉を喰ふ所であつた。

三、解隊式の後に

神戸三宮驛の待合室で私は五十日ぶりに解放された自分と言ふものをつくぐ見つめた。すっかり汚れて汗臭くなつた服や、帽子や、又切れかゝつた巻グートルが、この二ヶ月足らずの短い時日をひびく長かつたものゝ様に思はせた。じつと天井の旋風機を見つめてゐるこ、まださめずに残つてゐた解隊式の興奮は、身體のここかへだんく沈まつてきたが、何かしら大きな仕事をしてきた様な氣持こ、何か偉大な或るものを掴み得た氣持こが、新しい健康な興奮を湧き出させて來た。清新潑刺した心の底の或る衝動が、私に生きくした新しい意欲を生じさせた。

私はつゝ立つて室を出るこ、驛前の電車停留所の近くまで歩いてみた。人通りが激しかつた。電車も自動車も人も皆動き、働き、生きくしてゐた。ゴーツミ上下に車輛が往き交ひ、キキーツミブレイキがきしんだ。その間を汗を流しながらあらゆる人達が走り廻つてゐた。